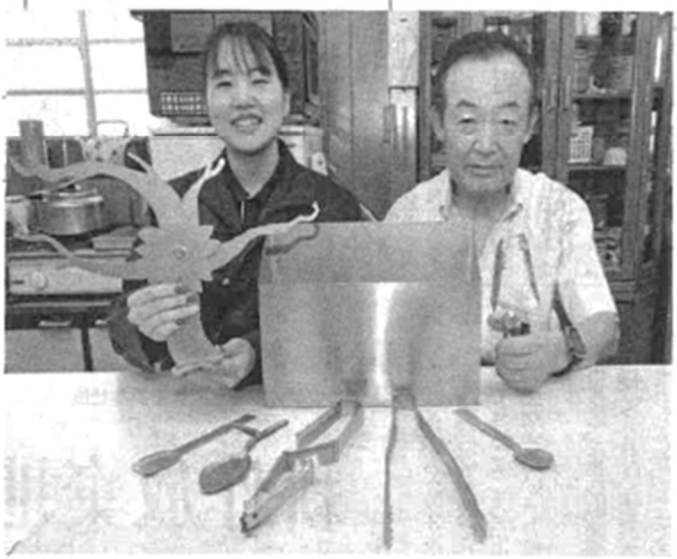
学生のアイデアを製品化

板金加工業の鶴田工業所

愛知淑徳大学と連携

アイデアをもとに試作を繰り返す鶴田社長（右）と若手スタッフ



板金加工業の鶴田工業所（本社名古屋市南区豊田5の12の41、鶴田修一社長、電話052・692・5014）は愛知淑徳大学と協力し、同社の技術力を生かして学生のアイデアを形にする。「中小企業で働く意義」を伝えながら、柔軟な発想で異分野開拓につなげたい考えがある。第1弾として、学生発案のアクセサリースタンドや「逆作用のトング」などを製品化し、市販も検討する。（小島圭司）

メッセナゴヤ 2026.11.11-13

形にする学生のアイデアは、アクセサリースタンド、逆作用のトング、ファイルボックス、はし置き、スプーンの5種類。それぞれ学生がアイデアを出し合って決めた。

アクセサリースタンドはインバウンド（訪日客）向けに、「桜の木」をモチーフにした持ち帰り可能な手土産品を意識した。アクセサリーが傷つかないよう金属に樹脂コーティングを施すなど高付加価値製品に仕上げる計画。

逆作用のトングは、一般のトングと真逆の発想が特徴。通常は手で柄を握り込むと「てこの原理」が働き、先端が閉じて食材をつかむ。対して「逆作用」は、当初からトングの先端が閉じた状態。握り込むと逆にトングが開く仕組みにした。握力の弱い小さな子どもが使うことをイメージし、高齢者や女性などにも配慮している。

スプーンは、高齢者が料理を最後まですくいやすいような形状を考慮したのに加え、スプーンで食材を小さく切り分けしやすいように工夫した。

オリジナル製品の提案は、愛知淑徳大学ビジネス学部の学部専門科目「チャレンジプログラムB」の中で行った。今年4月、鶴田社長が講義に登壇し、ステンレスや鉄、アルミ板を素材に、板金加工と溶接による商品開発を提案。学生らはチームごとにアイデア出しや具体化策、プレゼンテーション用の資料作成などの準備を進めてきた。

現在、学生の提案をもとに同社が試作を重ねており、11月に開かれる異業種交流展示会「メッセナゴヤ」で学生とのコラボレーション製品をお披露目する。

同社と愛知淑徳大学との連携は、愛知中小企業家同友会の活動を通して実現した。

同社は現在、新たに採用した20代の若手社員が主力として活躍しており、次世代に向けたブランド力の向上やさらなる新規採用につなげたい考えがある。鶴田社長は「若い世代と協力しながら人にやさしく、社会に必要とされるモノづくりを目指す」と話している。



学生に講義する鶴田社長（愛知淑徳大学提供）

中部経済新聞 2026年10月26日付

この記事は中部経済新聞社の承諾を得て掲載しています。